

地域は舞台 上山市民俗行事加勢鳥保存会(山形県上山市)

文 東浩紀 写真 鈴木勝

カツカツカー！ 「奇習」再創造

上山市民俗行事加勢鳥保存会

加勢鳥は、火伏せの力を持ち、五穀豊穡・家運隆盛をもたらす歳神様の来訪行事。厳寒の2月、半裸の上に藁でつくったケンダイと呼ばれる蓑をかぶって家々を回る若者に、水を浴びせる。上山では寛永年間に始まり、明治に入って途絶えた。1959年、市民有志の手によって、加勢鳥が復活。

1986年、保存会を結成。歴史資料に基づいた想像と新たな創作を加えて蘇った加勢鳥は、過酷で奇妙でどこかユーモラスな行事として注目を集め、インターネットを通じて、加勢鳥の演者の募集を始める。毎年のように外国人も参加するようになった。2016年、サントリー地域文化賞受賞。



上山城の展望台から見た上山市中心部。正面は蔵王。

上山を訪れた目的は、翌一日に市内で開催されるはずの「奇祭」加勢鳥——この呼び名が正確でないことをぼくはすぐ知らされることになるのだが——の取材にあつた。半裸の踊り手が、「ケンダイ」と呼ばれる藁で編まれた上着を被り、「カッカッカー」と奇声を発して市内を練り歩き、沿道の住民たちから冷水を浴びせかけられる。江戸期寛永年間にまで遡る、歳神様の来訪行事だという。かつては上山城に住む藩主のまゝで演舞を披露する「御前加勢」と、若衆が城下を歩く「町方加勢」が行われていたが、明治期にいちどそ

の伝統は途絶えた。それが昭和三〇年代、昭和の大合併で上山市が周辺自治体を呑み込むなかで、新市域を覆うアイデンティティとしてあらためて発見され、市民の力で復活したのだという。一九八六年には「上山市民俗行事加勢鳥保存会」が結成され、いまにいたっている。同団体は二〇一六年にサントリ地域文化賞を受賞しており、それが今回の取材につながった。

観光案内所は昨年オープンしたばかりで、明るい室内にはカフェと土産物屋が併設されていた。入口にはケンダイの模型が飾られ、ポスターも貼られ



「奇祭」ではなく「奇習」

山形新幹線で東京から二時間半。かみのやま温泉駅に到着したのは、二月一〇日の正午前だった。積雪は予想よりはるかに少なく、雲間からは太陽も覗いていた。ぼくとカメラマンは、まずは駅前の観光案内所に足を踏み入れた。

ている。けれども、行事の前日だというのに祝祭の気配がない。職員が法被を着ているわけでもないし、パンフレットが販売されているわけでもない。ぼくはいささか虚をつかれた。というのも、ぼくはこの「祭り」はかなり商業化されているのではないかと考えていたからだ。写真を見ればわかるが、ケンダイを被り、素肌の両手両足を突き出した加勢鳥の踊り手は、じつに独特なすがたをしている。公式にはそれは「鳥」に見立てられている。加勢鳥というのは、行事の呼び名であるとして



市民手作りの加勢鳥グッズ。

もに踊り手の呼び名でもある。けれども、不謹慎を承知でいえば、それは鳥よりも、むしろ手足の生えた藁納豆を思わせる。子どもが喜んで絵に描きそうな、たいへん「ゆるキャラ的」なすがたなのだ。ご当地キティちゃんのひとつに紛れ込ませてもらえば、全国区で売れてもおかしくない。



SNS映えのする加勢鳥は人気。

ところがそんな浅薄な予想は、保存会の大澤健一会長にお会いして吹き飛んだ。ぼくはまずグッズが少ないことについて尋ねてみた。会長は困惑した表情を浮かべた。つぎに参加者の広がりを探ねてみた。加勢鳥は踊り手をネット公募している。応募者には外国人もいる。ふたたび歯切れの悪い答えが返ってきた。さらに観光客の数や経済効果を尋ねてみた。するとはっきりと、経済効果は意識していない、そもそも加勢鳥は観光客向けではない、演舞は数分で終わるし、鳥が通り過ぎて



会長の大澤健一氏。

しまえばなにもないのだからという返事が戻ってきた。会長は加勢鳥を「祭り」と呼ばなかった。かわりに「神事」「行事」という言葉を使った。ポスターに目を向けると、そこに記されているのもたしかに「奇祭」ではなく「奇習」だった。

日本はいま観光ブームだ。どの土地にいても、祭りだインバウンドだと観光客の数の勘定に忙しい。そのなかで、加勢鳥はどうやら異なる道を模索しているようだった。インタビューの途中で、三〇代の青年が現れた。保存



副会長の倉裡錦矢氏。

会の新世代だという。保存会は数年前まで高齢化に苦しんでいた。踊り手も一時は六人にまで減り、公募に頼らざるをえなくなった。ところがその流れが地域文化賞の受賞をきっかけに変わった。いまは保存会会員の半数が四〇代以下で、地元の若い世代の踊り手も多い。今年は、ネットを見ての応募者の半数は断ることになった。青年会員とともにその変化について語る会長の表情は、さきほどまでと打って変わって明るかった。

加勢鳥は祭りではない。神事である。観光客が見るようなものではない。ぼくはその言葉の意味を考えながら、市内の温泉宿に向かった。上山は、城下に温泉を抱える全国的にもめずらしい城下町だ。

会長の信念は明確だ。けれどもむずかしさもある。宿に落ち着いたぼくは、文化財団から渡された資料にあらため



て目を通してみた。前述のように、加勢鳥の伝統は明治期にいったん途絶えている。復活は戦後一〇年以上がすぎたことだが、手がけた人々はまだもかつての加勢鳥を見たことはなかった。だからケンダイのデザインや掛け声は、古文書や古老の話からの想像で作られた。現在は演舞がありお囃子があるが、踊りは保存会が結成されたあと、秋田県の劇団に依頼して作られた。お囃子を担当する「火勢太鼓」(少し字が違う)も同時期にあらたに作られた。加勢鳥は神事と言われるが、演舞が特定の神社に奉納



お囃子の火勢太鼓メンバーが行列に従う。

されるわけでもなさそうだ。加勢鳥に冷水をかける儀式には、安全祈願の火伏せの意味がある。だから当日は上山城近くの古峯神社ふるまねによる火除けのお札が配布される。けれどもその神社は巡回コースに含まれていない。つまり、現行の加勢鳥の歴史はかなり短く、神道との関係もあいまいなのだ。それゆえ文化財にも指定されていない。むしろ加勢鳥の魅力は、その「伝統の再創造」の手作り感にこそある。



実際に地域文化賞の選考でもそこが評価されている。加勢島の運営は、行政でも宗教法人でもなく市民団体が担っており、その経費は、旅館や商店、一般市民からの寄付や関連グッズの売り上げで捻出している。だからこそぼくは観光客を意識しているはずだと考えていたのである。

若衆の通過儀礼

翌二月一日は早朝から保存会に同行した。三六人の踊り手はまず城近く

氏(市議会議長も務められている)による挨拶が始まる。加勢島は神さまの使いなんだから今日は品行方正という高橋氏の言葉は、内容とは裏腹に柔らかくどこか滑稽みがあつて、会場は何回も笑いに包まれる。続いてひとりひとり踊り手が紹介され、名前と参加回数が紹介されるたびに拍手があがった。思わず頬が緩んだ。ぼくはだんだんと会長が大切にしていることがわか



加勢島グッズ売り上げNo.1の子ども店長。

会長が市長ら地元の名士と並んで頭を下げる。この儀式こそが会長が言っていた「神事」の核心のほずだつたが、率直にいつてあまり強い印象を残さなかった。ぼくはむしろ、そのあとに行われた

のホテルの宴会場に集合する。女性参加者は五人。うちひとりはアメリカ人で、ひとりは韓国人だ。女性は別室に導かれ、男性はその場で服を脱ぎ始める。白い下穿きと足袋を身につけ、腹部に真っ白なサラシをぎゅうぎゅうに巻いていく。乳首や肩をシールで保護している男性が目立つ。理由を尋ねると、ケンダイの葉で肌が痛むからだという。寒さよりもそちらのほうが厳しいと漏らすひともいた。

初参加の踊り手もいれば、二〇回を超えるという猛者もいた。着替えを終えた女性に戻ってくると(女性は胸までサラシを巻いている)、会長と保存会顧問の高橋義明

り始めた。

九時を過ぎたあたりで上山城址の公園に移動した。公園には三層天守を模した城館(郷土資料館)が建っているが、それもまた八〇年代に作られたものだ。城館前の広場には数百人の市民が集まり、火が焚かれ、甘酒が配られていた。一〇時から「安全祈願式」が始まった。組立式の祭壇をまえにして、神主が祝詞を唱え、玉串を振り、

出陣式(そうは呼ばれていなかったが)に関心をもった。

三六人の踊り手がコートを脱ぎ、水点下に近い気温のなか、半裸になつて城館入口の階段にずらりと並ぶ。会長がひとりひとり、名前と住所と参加回数を読み上げる。朝の紹介はこのための確認だったのだ。名前が読みあげられるたびに、集まった市民から大きな拍手が湧き、家族や友人から声援が飛ぶ。踊り手は腕をあげたりおどけた格好をしたり、思い思いのかたちでその声に応える。紹介が終わると彼らはケンダイを被り、最初の演舞の会場ではずらりと冷水が並んでいる。ケンダイの隙間から覗く頬は紅潮し、はやくも剥き出しの腕はぶるぶると震えている。その腕をマフラーを巻きコートに身をくるんだ老人が叩き、負けるなよと声をかける。踊り手の最年長は五〇



今年の女性参加者は5人。8回目のアマンダさん(左から2人目)以外は全員初参加。



商売繁盛、家内安全と火除けを祈願して水を掛けたあと、加勢鳥に新しいタオルや手ぬぐいを巻きつける。

と呼んでいたのだ、だから観光客に見せるものではないと言っていたのだし、保存会の若返りをあんなに喜んでいたので、はじめて加勢鳥の本質を捕まえたように思った。

加勢鳥の一行は、一一時に城を出発し、午後四時近くまで、途中休憩を挟みながら半日のあいだ市内を練り歩く。所要所で演舞を披露し、水をかけられる。演舞といつても振り付けは



県外11羽、県内25羽(内、上山市内11羽)、計36羽の加勢鳥演者が勢ぞろい。



加勢鳥に水をかける筆者(画面左、白いニット帽を着用)。

おそろしく単純で、一〇人ていどの踊り手が輪になってぐるぐると回り、ときに片足で飛ぶだけだ。歌謡も同じく単純で、「加勢鳥、加勢鳥、お祝いだ、商売繁盛、万作だ」「カッカッカーのカッカッカー」と続く歌詞は、古語でもなければ雅語でもなく、小学生の子どもでもかんとんに真似ることができ

歳代後半で、そこにいるのはかならずしも若者ばかりではない。けれどもごくはその光景を見て、ああそうか、これはなによりもまず若衆のための通過儀礼なのだ、会長はその機能を「神事」



舞い終わった加勢鳥、そして観客にも振る舞いをする商店や旅館。このお店では熱々のクリームシチューを用意していた。



加勢鳥の葉で髪を結ぶと、女の子は黒髪豊かな美人になると言われている。

る。演舞の中心では、太鼓のリズムにあわせ、法被を着たスタッフが「火の用心」と記した火消しのまといを振りあげている。これもまた昭和期の創作だろう。演舞が終わると、踊り手は拡声器をもったスタッフに導かれて歩き始める。見学者はそのあとをぞろぞろとついていく。子どもがケンダイから抜け落ちた葉で遊んでいる。カメラを

抱えた観光客が、濡れた上着を苦笑しながら乾かしている。そこに「神事」の言葉がもつ敵かさはない。徹底的に世俗的な光景だ。けれども伝統はたしかに「再創造」されていた。
うしろから、ぼくも将来鳥になるんだ、と年端のいかない男児のカン高い声が聞こえてきた。父親が笑った。加勢鳥は人々に愛されていた。

(あずまひろき・批評家)